森と共に地域の力で
未来を創る

岡崎市における
SDGs
推進事例集

はじめに

岡崎市は 2020 年 7 月に「SDGs 未来都市」に選定され、「岡崎市 SDGs 未来都市計画書」を策定しました。SDGs とは「Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）」の略称で、2030 年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標です。17 のゴール・169 のターゲットから構成され、地球上の「誰一人取り残さない」ことを誓っています。

国の脱炭素社会実現の方針を受け、岡崎市では、2050 年のゼロカーボンシティの実現に向けて、市域の地域特性、自然環境、産業構造など総合的に勘案した快適な生活空間の形成や地域経済の活性化につながる取り組みを推進しています。森林そのものや森林資源・森林空間の活用が様々な SDGs に貢献し、森林の整備・保全に還元されるという大きな循環につながっています。

森林をはじめとする河川や水源地など豊富な自然資源を有する岡崎市において、SDGs 及びカーボンニュートラルを学ぶ機会や、それに対して企業などがどのように取り組んでいくかを具体的に考える契機を段階的に提供し、本質を理解し、活動していく人材を育てる取り組みとして、2021 年より 3 年間 SDGs セミナーを運営してきました。

初年の 2021 度は、グローバルとローカルの両面から SDGs について学ぶ学習会を開催しました。

	講師	テーマ
第 1 回	佐藤真久氏（東京都市大学教授）	「SDGs の本質と企業が取り組む意義」
第 2 回	辻井隆行氏（元パタゴニア日本支社長）	「SDGs と消費行動」
第 3 回	枝廣淳子氏（有限会社イーズ代表）	「SDGs と地域経済」
第 4 回	新井和宏氏（株式会社 eumo 代表取締役）	「SDGs と消費行動」
第 5 回	竹本吉輝氏（株式会社トビムシ代表取締役）	「SDGs の実践に向けて」 （事例紹介とグループディスカッション『地域の資源を生かして地域活性化に貢献するには』）

※講師の肩書はセミナー開催時のものです

2022 年度は、前年度セミナーで SDGs の本質や地域経済循環の効果を学んだ参加者を対象に、具体的に森林資源をどのように有効活用しビジネスに活かすかを学ぶ機会（アイデア、関係づくりの場等）および参加企業間の有機的なつながりを持つきっかけとなる機会として講演とワークショップの 2 部構成のセミナーを全 4 回実施しました。

	講師	テーマ
第 1 回	江口則和氏（人間環境大学　講師）	「森林・林業の現状と課題」
第 2 回	小原淳氏（西三河林材団体連合会　会長）	「森林整備の重要性」
第 3 回	小串重治氏（グリーンフロント研究所株式会社　代表取締役）	「企業と森林とのつながり」
第 4 回	木質化の取り組みと木材の具体的な利用方法として、くらしの杜クリニック *、岡崎信用金庫城下町支店 * を小原淳氏 の解説とともに見学	

※講師の肩書はセミナー開催時のものです

2023 年度は、機運が高まりつつある森林 ×SDGs の取り組みを全市的に展開するべく、市内の先進企業の取り組み事例を共有し、参加者同士が SDGs 推進に関する情報収集や意見交換、課題相談できる場を提供しました。

「岡崎市における SDGs 推進事例集」は 2023 年度 SDGs セミナーに参加した企業の SDGs の取り組みをまとめたものです。事例集をきっかけに SDGs の取り組みが広がっていくことを期待しています。

* くらしの杜クリニック（岡崎市羽根町字若宮 30-1）第 5 回あいち木づかい表彰最優秀賞受賞施設
* 岡崎信用金庫城下町支店（岡崎市上六名 2-8-8）第 1 回あいち木づかい表彰優秀賞受賞施設

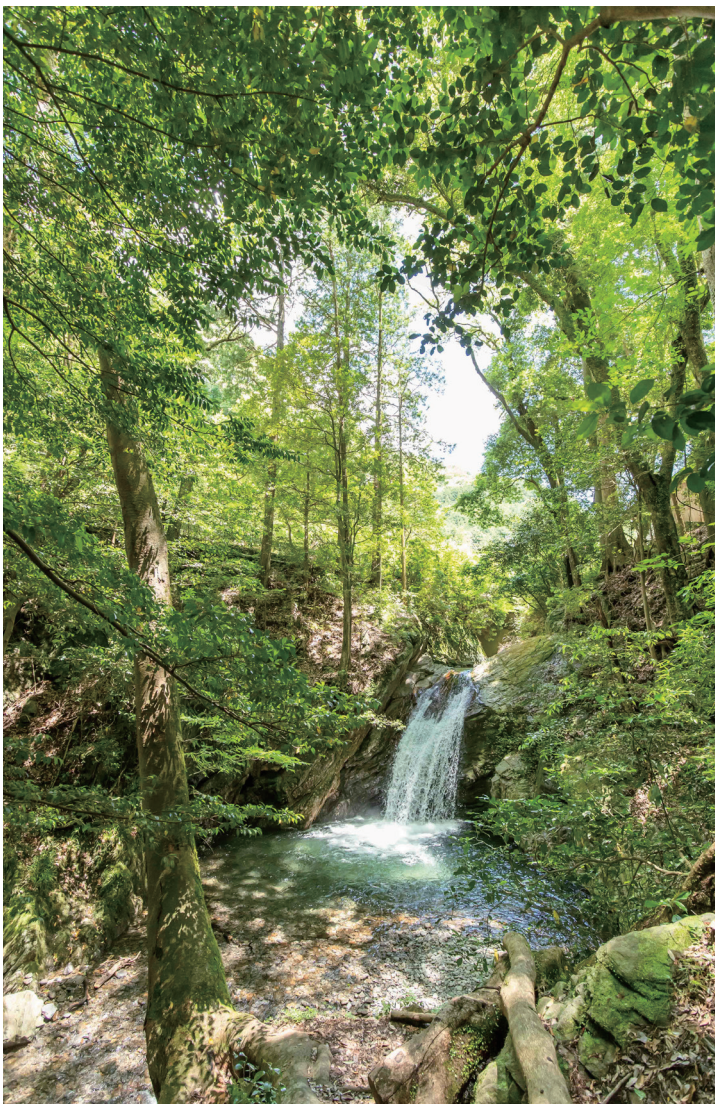
SDGsとは？

SDGs とは､2015 年 9 月国連で採択された「持続可能な開発目標」です。「誰一人取り残さない」という理念のもと、「世界の貧困をなくす」「持続可能な世界を実現する」ことを目指した、2030 年を達成期限とする 17 のゴール、169 のターゲット、および、その進展を評価するための指針を持つ包括的な目標です。

おかざきの森林資源を知る

2006 年に旧岡崎市と旧額田町が合併した岡崎市は、人口約 40 万人という比較的大きな自治体ながら、市域の約 60%である約 23,000ha を森林が占め、豊かな森と豊富な水源に恵まれています。飲み水や工業用水の約 50%を市内にある水源により確保しております。

明治中期には、はげ山や草地もありましたが、明治期の植林や村有林の形成、戦後の広葉樹林からスギ・ヒノキ人工林への転換などの歴史的経緯を経て、現在、森林は市域の約 60%を占めており、そのうち約 90%が木材として利用可能な 40 年生（8齢級）以上の森林です。人工林は、間伐等の適切な森林整備の実施によって良質な木材の持続的な供給に向けて木材等生産機能を高めるとともに、公益的機能を十分に発揮させていくことが大切ですが、額田地域を中心に分布する人工林は、林業の低迷により手入れが十分に行き届いていないのが現状です。また、市街地周辺から山間部にかけての地域に分布する里山林や、国定公園や県立自然公園等を中心に分布する、優れた自然環境を持つ天然林については、レクリエーションや生物多様性保全の観点から適切に管理・保全を行うことが求められます。



市街地周辺から山間部にかけての地域に分布する里山林は、有史以来、人間の営みによってつくりあげられ、受け継がれてきた風景であり、地域固有の動植物の生息・生育場所として、また、日本人共有の原風景・精神文化の基盤となっています。生物多様性の保全や、文化の継承という観点からも、里山林の保全と活用を進めていくことが必要です。森林づくりを支える「地域の環」・「人の環」を形成していくことにより、適切に保全・管理された多様な森林が健全な状態で共存し、地域のぬくもりあふれる木材やその他林産物が持続的に生産される「岡崎らしい森林」の創造を目指しています。

ところで、森は誰のものでしょうか？登記簿上はもちろん所有者のものですが、所有者であっても自由に伐採したり開発したりはできません。山林が洪水や土石流による甚大な災害を防いでいるからです。水源と美味しい空気や美しい景観を生み出してくれる森林に手を入れることは慎重でなければなりません。一方で一度手を入れた森林は、100 年先の将来を見据えて森林の整備と環境保全のための絶えまぬ努力を続ける必要があります。人工林や里山林の放置が続いていけば、良質な木材等生産ができなくなり、森林の持つ様々な働き（多面的機能）の低下につながります。

100 年先の将来のために大きな役割を果たしている組織のひとつが森林組合です。森林組合は森林組合員（森林所有者）の出資等により、設立・運営・利用される組織で、全国に 610 組合（2021 年）存在します。愛知県下には 50 年前には 50 以上の森林組合が存在しました。統合が進んだ結果、現在は 6 つの森林組合があり、そのうちのひとつである岡崎森林組合は 2021 年に満 100 年を迎えました。

岡崎森林組合は、組合員の所有森林で国や県の補助事業を活用した生産間伐、保育間伐、森林整備（伐採、草刈、間伐、枝打など）、調査、治山、林道整備や木材やその他林産物の販売などを行っているほか、林業の担い手確保、地域森林の経済的な価値向上のため、森林整備担い手人材育成事業や木づかいＰＲ、森林の環境貢献機能の社会経済的価値評価をＣＯ２吸収源のクレジット化・販売によって山林に還元していく「フォレストック認定制度」によるＣＯ２吸収源クレジットの発行なども実施しています。2023 年 12 月にわんパークで開催されたオクオカわんぱく祭りでも林業重機パフォーマンスを披露しました。市内のイベントやお祭りで岡崎森林組合の仕事を知る機会は意外とたくさんあります。豊かな自然や豊富できれいな水の縁の下の力持ち、森林組合のお仕事に興味を持った方は是非遊びに来てみてください。

岡崎森林組合　岡崎市明見町田代９－１　https://okamori.org/
岡崎市森林整備ビジョン（令和 3 年 3 月改訂）
https://www.city.okazaki.lg.jp/1300/1303/1324/p029025.html

株式会社葵商店

高志創造　持続可能な循環型社会へのチャレンジ

葵商店は 1957 年に岡崎市で創業した鉄鋼流通事業者（コイルセンター）で、自動車関連を中心に鋼製家具や家電など幅広い業種のものづくりを支えています。コイルセンターとして、鉄鋼メーカーから供給される鋼材のコイルの加工機能、在庫管理機能、品質管理機能を担っています。一見、陸の豊かさへの貢献は少なそうですが、地球環境や人権問題など人々の意識が高まる中、企業理念のひとつ、「地球市民」を具現化するため、葵商店として持続可能な循環型社会への貢献を目指し、岡崎の森の保全に役立つ取り組みを始めています。

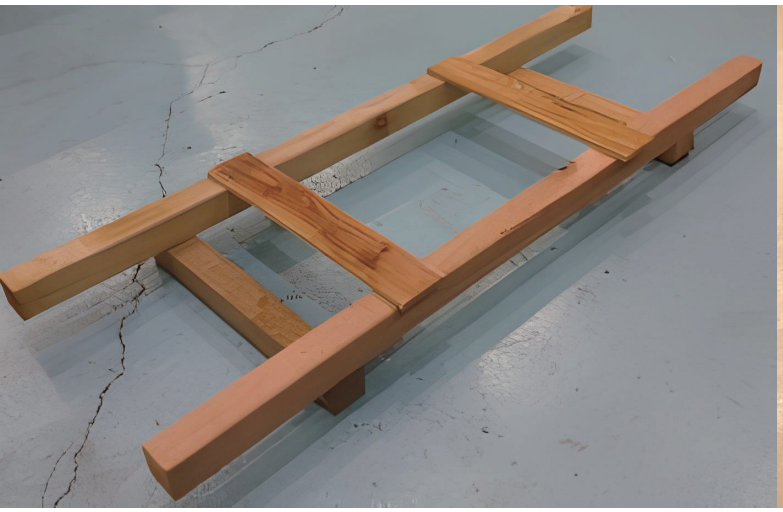
2021 年度から実施している岡崎市主催の SDGs セミナーに参加したことで、地域の森林が抱えている課題やポテンシャルへの気付きがあった、と同社管理部長の小沢佳治さんはいいます。葵商店では、鋼材の梱包資材

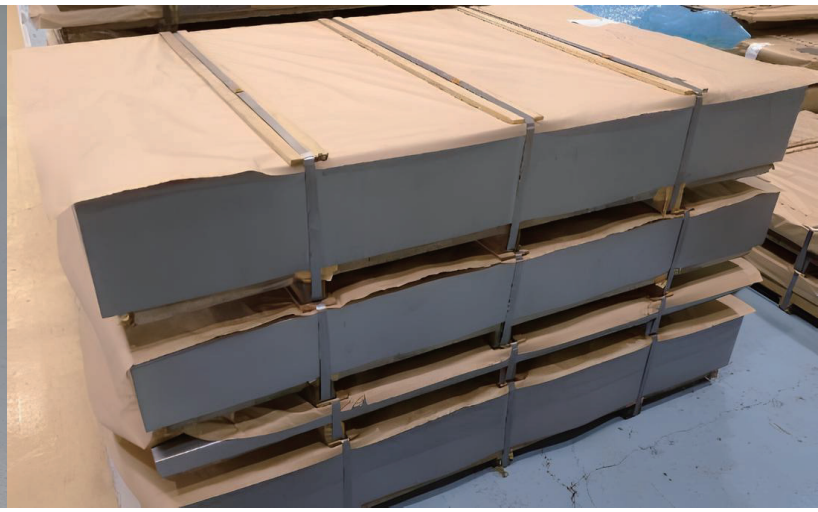
株式会社葵商店

高志創造　持続可能な循環型社会へのチャレンジ

として木材を使用していますが、これまでは海外や国内遠隔地で製材、輸送されている木材を購入して使用していました。これらの木材を地元の木材に切り替えることで、木材調達時の輸送に関する CO2 排出量削減や地域の森林保全、陸の豊かさへも貢献できると考えました。

鋼材・鉄板の梱包仕様の一例を見てみましょう。5 センチ角の木材の棒を井桁に組んだ木製パレットの上に鋼材を積み上げて紙をかぶせ、薄い木材の板（当て板）を当て、その上から鋼製のバンドで強く縛ります。バンドを絞めるときに当て板にバンドが食い込むことによってほどけないようになっています。鋼材は見た目以上にとても重たいので荷崩れすると死亡災害にもつながりかねず、梱包資材の選定においては安全面が確保されているかどうかも慎重に吟味する必要があります。





検討にあたっては、地元岡崎市で林業の 6 次産業化を図る地域商社「株式会社もりまち」と何度も打合せを重ね、テストを行いました。その結果、2023 年 8 月より、まずは当て板の岡崎市産材への切り替えを実現、その量なんと年間28,000 枚、体積にして 35 ㎥ほど。これまではフィリピンなどの東南アジアから、あるいは国産材であっても広島などの遠隔地から運ばれてきていた木材をすべて岡崎市産材に切り替えることによって、輸送時の CO2 排出量を削減できます。仮に、全量広島県産木材からの切り替えであった場合でも、約 1t-CO2 削減できると試算することができ *1、海外から輸入する場合と比較すると削減量は更に大きいと考えられます。また、当て板を仕入れている株式会社しらいの製材工場は、葵商店額田工場から車で約 15 分の距離。葵商店の社員自らが引き取りにいくこと、丸太を製材したあとの木材を有効活用することで価格面でも従前と遜色のない水準を実現、経済合理性のある持続可能な形となりました。

株式会社葵商店

高志創造　持続可能な循環型社会へのチャレンジ

葵商店では、当て板よりも強度の求められる土台の角材の部分も岡崎市産材への切り替えも目指し、もりまちと強度テストを重ねています。また、岡崎市外にも取り組みを広めるべく、美濃加茂工場でも継続した地域木材の購入を目指して試行錯誤。さらには、取引先にも協力をあおぎ、出荷に使った木質パレットの回収率を高め再利用。再利用を重ねた末に最終的には産業廃棄物として廃棄していた木材を、地元岡崎市の有限会社ヤマガネ商事の協力を得て、有機物としてリサイクルや燃料としての活用を実現すべく協議を進め、2024 年 3 月より試験的に取引をスタートします。葵商店の挑戦はこれからも続いていきます。

*1　広島県～静岡県を船舶、静岡県～葵商店額田工場を営業用貨物車で輸送した場合の一定の仮定に基づき、木材重量 × 距離 × 輸送手段別単位輸送量当たりの CO2 排出量により試算・算出。（中京大学　非常勤講師　小串重治氏　監修）

まだまだ SDGs

葵商店では約130人の人が働いています。取り組みを検討し始めたころは、SDGsといっても何をしたらいいのか自分事化するのが難しい、という方も多くいました。そこで、全社員を対象に研修を実施。SDGsボードゲームなど、楽しみながらコミュニケーションも取れるワークショップも取り入れ、夜勤勤務の方も参加できるよう4回に分けて開催することで全社員の参加を達成しました。その結果、経営トップの想いを社員が共有し、社員一人一人に動機づけや当事者意識醸成ができました。

「社長が休日にプロギング（ジョギングとゴミ拾いを一緒に行う）をしている」という話をきっかけに、社員が自発的に始めた取り組みがあります。地域の小学生が通る朝の登校時間帯に、工場近くの交差点で交通立哨をして、立哨後はゴミ拾いをしながら会社に帰るという取り組みです。すれ違う地域の方とあいさつを交わしたり道路がきれいになったり、と朝からすがすがしい気持ちになれるとても良い取り組みです。

AOI CO.,LTD.

株式会社葵商店
岡崎市牧平町字岩田 3 番地 28
https://www.aoi-syoten.co.jp/

有限会社ヤマガネ商事　https://www.yamagane.co.jp/

株式会社鈴六

社会問題「ファッションロス」をデザインで解決に向ける

※上図は株式会社ニューモアの運営する障害福祉 × デザインの協働チーム「想造楽工」が手がけました。

岡崎市では、古着の回収率が 32%と低くほとんどが焼却処分されています。CO2 排出量は焼却時より製造時の方が多いと言われており、まだ着られる服を燃やして新しい服を作る行為は社会的にも大きな問題です。鈴六は社会問題「ファッションロス」をデザインで解決すべく、地域共生による積極的な資源循環の取り組みを進めています。

ペットボトルや古紙の回収ボックスは街中でもよく見かけますが、古着の回収ボックスの設置はまれ。鈴六は、女性受けするきれいなデザインの回収ボックスの開発・設置で回収率アップを狙います。回収ボックスの開発にあたって、愛知産業大学　造形学部スマートデザイン学科森先生にデザインを依頼したところ、間伐材活用の提案を受けました。岡崎市の 6 割が森林で、その 6 割が人工林、地元の資源である間伐材を使用することで、森林資源の循環と森林保全の促進にも貢献できるのです。

開発した回収ボックスプロトタイプの設置に際しては、SDGs セミナーやあいち環境塾で知り合った地域のネットワークが活き、初めての試みでありながら JINS 岡崎イオンモール店やスギ薬局岡崎欠町店に設置することができました（JINS 店舗では 2024 年 2 月現在設置していません）。清潔感があり木材の温もりを感じられる回収ボックスは、店舗スタッフにも来店されたお客様にも好評。手ごたえを感じた鈴六では、更なる設置拡大に向け、株式会社もりまちとともに量産型回収ボックスの開発に取り組んでいます。

株式会社鈴六

社会問題「ファッションロス」をデザインで解決に向ける

岡崎市内のネットワークを活かし、回収された古着はリユース、リサイクル、そして新たな製品へとつながっています。特に力を入れているのは、手作業による選別作業です。マニュアルときめ細やかな研修により 90 種類もの分別を実現しており、選別のレベルが高いことが高付加価値化につながり、鈴六の強みとなっています。
選別された古着の行き先として最も多いのはリユース、約 50%が東南アジアに輸出されて再利用されています。「鈴六経由のユーズドインジャパン」衣類はブランド価値が認知され、先方の要望により梱包資材に鈴六のロゴを印刷して出荷しているほどです。

残りのうち約 30%はフェルトに形を変えてリサイクルしています。一度作った繊維をフェルトとして使い続けることで焼却処分のタイミングが後ろ倒しになり、使用期間に対する CO2 排出量削減にも貢献しています。ビジネスパートナーである株式会社清水フェルト工業が開発した特殊フェルト、ファイバーソイルは地域でのピーマンの栽培にも活用されており、岡崎市内の飲食店で実際に食べることもできます。わたしたちが回収ボックスに持ち込んだ古着が、ピーマンの栽培に一役かってわたしたちの食事になって戻ってくると想像するとわくわくしますね。さらに、残りの約 15%は工業用ウエスに加工され、回収された古着はほとんどが再利用されています。

鈴六の取り組みは、地域内での古着回収から始まり、地域の事業者や資源と協働しながら、地域資源の最大限の活用・循環に役立っています。

まだまだ SDGs

衣類は焼却処分する際のCO2排出量よりも、製造する際のCO2排出量の方が多いと言われています。一度作られた衣類・繊維を、衣類として長く使い続けることはCO2排出量削減にも貢献します。

鈴六では女性従業員も多く活躍しています。きめこまやかな社員教育によってレベルの高い分別を実現。分別ラインに配置する人員には余裕を持たせ、やむなく急な欠勤等が発生せざる得ない社員も働きやすいよう配慮しています。

SUZUROKU Co., Ltd.

株式会社鈴六
岡崎市大平町堤下 73 番地1
https://suzuroku.studio.site/

株式会社清水フェルト工業　https://www.sfk.co.jp/
株式会社ニューモア　https://newmor.net/

株式会社ジンズ

アートワークショップを中心とした優れた見る体験の提供

アイウエアブランドの JINS と言えば皆さん一度は目にしたことがあるのではないでしょうか。
イオンモール岡崎店内の JINS の店舗は、地元岡崎市産と三河産の間伐材を使用した約 550 個の木箱を設置した広々としたとても心地のよい空間です。全国で特徴的な店舗をいくつも手掛ける JINS における、2021 年に群馬県前橋市にオープンした「JINS PARK」に続く「地域と共生することを目指した店舗」です。

イオンモール岡崎店では、地域共生型店舗として、メガネを買いたい人も買う予定のない人も地域の人が気軽に店舗に立ち寄りたくなる取り組みをたくさん手掛けています。店内に 1,500 冊もの書籍を並べて誰でも自由に手に取れるようにしたり、株式会社鈴六が岡崎市産材の間伐材を使って開発した古着の回収ボックスを設置したり（2023 年 2 月～ 5 月実施※現在は設置していません）、「見る育」の一環で実施するアートワークショップもそのひとつ。

株式会社ジンズ

アートワークショップを中心とした優れた見る体験の提供

「見る育」は、未来をつくる子どもたちの見る目を養うことを目的に、子どもたちや保護者に対して、目の健康を啓発したり、視力や光についての学習機会を設けたり、見ることの楽しさに気付いてもらう活動です。イオンモール岡崎店では、地元で活動されているアーティストを講師に招き、実際に子どもたちに主体的に体験し想像・体感してもらう機会を提供しています。最近では、2023 年 11 月に桜城橋橋上広場で東海地方出身のアーティスト 荒木由香里さんをお招きし世界でひとつだけのメガネを作るアートワークショップを実施、たくさんの親子連れでにぎわいました。ぜひ、今度は、木箱の故郷である岡崎の森に子どもたちと一緒に遊びに来てほしいですね。

まだまだ SDGs

サステナビリティビジョン「アイウエアを通して、未来の景色を変えていく。」に基づき、様々な取り組みを行っています。アイウエアのサステナブル素材化、店舗改装時の什器等の再利用など各種廃棄物の削減とリサイクル、不要メガネの回収とリサイクル、再生紙ショッパーへの転換、メガネ拭きのエコ素材への転換、店舗スタッフ制服の循環型素材の採用など…、その取り組みは多岐にわたります。

JINS

株式会社ジンズ　JINS イオンモール岡崎店

岡崎市戸崎町外山３８-５ イオンモール岡崎３Ｆ

https://store-jp.jins.com/b/jins/info/20067/

森と子ども未来会議

地域の森から学童保育所＋αを木造化、街に森を創るプロジェクト

森と子ども未来会議は「伝統構法×協働」で「地域の森から学童保育所＋αを木造化」する団体です。立ち上げのきっかけは名古屋市内の山里学童クラブ。全国には24,493か所、36,094支援単位の学童保育所があり、1,404,030人の児童が入所（2023年5月1日現在　全国学童保育連絡協議会HP*より）していますが、学童保育所の3割程度はプレハブの施設だと言います。1981年に誕生した山里学童クラブは長い間プレハブでしたが、夏は冷房が効きづらく冬は寒い、音は中にも外にも響きやすく、子どもたちが過ごす環境としては過酷なものでした。

森と子ども未来会議の発起人の一人で代表も務める鈴木建一さんが、一級建築士の東海林修さん、学童保育所の関係者の方と意気投合したことがきっかけで、学童保育所の木造化プロジェクトがスタートします。

山里学童クラブの木造化を実現したのは、板倉構法。柱と梁の間に板を落とし込む構法で、日本古来の神社や穀物倉庫を作ってきた優れた木造建築技術を応用したものです。木を太く厚くあらわして使うことで、耐震性も防火性も高く、温度湿度の安定した室内環境を実現します。また、木材は、音を適度に吸収するため、子どもの声やピアノの音が心地よく聴こえるなど、人の生理面や心理面に良い影響を与えたりすることが各種実験でも確認されており、学童保育所でも子ども達が落ち着いて遊んだり勉強できるようになったとの声が聞かれるそうです。板倉構法は施工だけでなく解体も容易で移築も可能なため、借地の上に建つことの多い学童クラブの施設としてはもってこいでした。

森と子ども未来会議

地域の森から学童保育所＋αを木造化、街に森を創るプロジェクト

発起人の鈴木建一さんが額田木の駅プロジェクト* 常任委員を務める縁もあり、山里学童クラブの木造化には、岡崎市内の事業者が大きく貢献しています。木材の提供は一般社団法人奏林舎ほか岡崎市額田地域の林業事業体が協力し、製材は株式会社しらい、有限会社山岩木材、板倉のパネルの作製は小原木材株式会社が担当しました。森と子ども未来会議では、山里学童クラブにはじまり既に10近くの学童保育所の木造化・木質化を手掛けていますが、愛知県内におけるプロジェクトで使う木材のほとんどは矢作川流域の山々から伐りだされたものを使用し、地域内での資源・資金循環を促進。従来、木材の流通には原木市場や製材工場、木材業者等いくつもの事業者が関与していますが、森と子ども未来会議が中心となって情報共有を行うことで山と街が直につながり、良い森・街づくりに貢献しています。

*全国学童保育連絡協議会 学童保育実態調査 2023年度放課後児童クラブ実施状況調査より
https://www2s.biglobe.ne.jp/~Gakudou/index.html

*額田木の駅プロジェクト　出荷しやすい短い間伐材を通常よりも高く買い取り森林整備を促進する取り組み
https://nukatakinoeki.blogspot.com/

まだまだ SDGs

より良い保育のために施設の木造化を考える「学童保育の木造化勉強会」や、一般社団法人奏林舎、株式会社しらいの協力のもと岡崎市内にて、学童保育所の子どもと保護者を対象にした「森とまちをつなぐきこり＆製材体験」なども実施しています。子どもたちや保護者が、地元の森林や自然環境、木を通じたなりわいに触れる機会にもなっています。

板倉構法は木材を太く厚く使います。同じ広さの建物を建てる場合、一般的な木造建物と比較して木材をおおよそ3倍使うため、木材の CO_2 の固定量も約3倍。壁、床、屋根をスギの厚板2枚張りとし、間の空気層とあわせて、温度湿度の安定した夏涼しく冬温かい室内環境をつくるため、冷暖房機器による電力消費抑制にもつながります。

中部電力パワーグリッド株式会社　岡崎支社

「電力の安定供給」と「電力供給設備の有効活用」

中部電力パワーグリッドは、中部電力株式会社が2020年に分社化して誕生した会社です。グループ経営管理や再生可能エネルギー発電事業、原子力発電事業は持株会社である中部電力、小売事業は中部電力ミライズが担い、中部電力パワーグリッドは送配電事業を担っています。いつでも安心して電力を使えるよう 24 時間 365 日電力の保安管理に努めることが一番の使命。わたしたちが当たり前のように毎日安心して電気を使えるのは中部電力パワーグリッドのおかげです。

広域停電防止のため、特に注意が必要なリスク要因はなんとカラスの巣。カラスが電柱に巣を作ると広域停電の発生原因になる可能性があるのだそう。また、電線と樹木が接触しても停電に繋がる可能性があるため日々巡視して見守っています。しかし、電柱は約 40m に１本の間隔で立っており、全ての電柱を毎日見るのは物理的に難しく、地域の方の情報提供も重要な要素となっているといいます。街中だけでなく岡崎市の豊かで広大な森の中でも、中部電力パワーグリッドの方の巡視業務に遭遇することがあり、地元では身近な存在として親しみを持たれています。

中部電力パワーグリッド株式会社　岡崎支社

「電力の安定供給」と「電力供給設備の有効活用」

「電力の安定供給」のために重要なもう一つの要素は、「電力の需要と供給の量を常に一致した状態に保つ」こと。電力の性質上、一致していないと電力の供給を正常に行うことができなくなり、広域の停電に繋がるそうです。ここ数年の再生可能エネルギーの普及により電力の「供給量」が「需要量」を上回ってしまう瞬間もあるそう。その場合は再生可能エネルギーの発電を制限することもあるようです。せっかくクリーンな電力が発電できるのにもったいないですよね。対策として蓄電・蓄熱機器で「供給」のタイミングをずらし、自家消費すること。みなさんも検討してみてはいかがでしょうか。

「つくる責任つかう責任」としては、電力供給設備の有効活用にも注力しています。例えば、「みまもりポール」というサービスでは、既存の電柱に防犯カメラを設置することでポールの設置コストや手続きの煩雑さを解消し、地域資源の有効活用、地域の防犯強化を図っています。同様に、鉄塔でも「鉄塔等設備貸出サービス」にてスペースを貸し出すなど、社会全体の資源抑制につなげています。

中部電力パワーグリッドの「電力の安定供給」と「電力供給設備の有効活用」の取り組みは、SDGs の 7 番目「エネルギーをみんなにそしてクリーンに」や 12 番目「つくる責任つかう責任」に直結しています。今日からできる SDGs、カラスが電柱に巣を作りかけているのを見つけたら、ぜひ中部電力パワーグリッドに連絡してくださいね。

まだまだ SDGs

停電防止のために伐採した樹木を、東公園動物園に提供しゾウの餌にする取り組みも進めています。焼却処分すればゴミとして環境負荷が生じますが、動物園に提供することで豊かなまちづくりに役立っています。

停電情報お知らせサービス

「電力の安定供給」のために、万が一広域停電が発生した場合にも備えて、早期復旧と情報発信に力を入れるべく、情報提供アプリや HP を通じての情報発信を強化し、より多くの人に届ける取り組みも進めています。

https://teiden.powergrid.chuden.co.jp/pr/index.html?cid=ul_bn2

中部電力パワーグリッド

中部電力パワーグリッド株式会社　岡崎支社

岡崎市戸崎町字大道東 7 番地

https://powergrid.chuden.co.jp/

株式会社もりまち

岡崎の森を起点として
中山間地域の持続可能性を高める

岡崎市は市域の60%を森林が占める森林都市。わたしたちはたくさんの恩恵を森林から受けていますが、木材価格の低迷や、所有者の高齢化などによる林業の担い手減少、生活様式の変化等を背景に、森林の持つ機能を十分に発揮するために必要な森林整備が実施されていない状況となっています。岡崎の特徴でもある、森と川、街を活かして、もりとまちを川でつなぎ、林業の活性化を通じて地域全体の発展を目指そうと 2022 年 2 月に設立された会社がもりまちです。

山の人たちが伐ってくれたものを街の人たちが使いやすいよう、品質、納期を約束できる流通体制の確立を目指すことをまず一番に。同時に、街側と山側の距離を縮めること、森について知ってもらうことも大事だと考えて、最近では一般企業との連携・協力の取り組みも加速させています。

「誰かの森」から「わたしたちの森」へ感じてもらうために実施している企業研修もそのひとつ。社員やその家族の方を対象に、森林の持つ涵養機能を体験するための水の実験をしたり、チェーンソーや枝払いの体験をしたり、森林の話をするだけでなく楽しく体験することを通じて、森の豊かさを体感してもらいます。自然との共生の話や体験をとおして、岡崎の森に興味を持ってもらい本業の中で何ができるか考えてもらう機会を持つことがとても大切です。

株式会社もりまち

岡崎の森を起点として中山間地域の持続可能性を高める

直接、密にコミュニケーションをとることによって、株式会社葵商店の梱包用木材の一部岡崎市産材への切り替えも実現、岡崎市産材の約半分はチップになってしまっていた現状打破に大きく貢献しています。立派な建築用材でなくても、当て板としては問題なく使える事実は、担当者同士が熱意をもってやり取りしたからこそ分かった発見。今までは規格品を大量生産大量消費する社会でしたが、これからは対話を重ねて、それぞれの事情を丁寧にすり合わせて、地域のものを大切に使っていくことが必要だと考えています。

街側、森側との人の交流を創出し、中山間地域に興味を抱いてもらうことによる、移住者の増加や担い手の確保を進めることで、林業活性化と合わせ森林を起点として中山間地域の持続可能性を高める働きをこれからも進めていきます。

まだまだ SDGs

岡崎市では、市内公園の魅力を高めるため、また、SDGs の取り組みの一環として、公園に岡崎市産財のベンチを設置するための寄附を募っており、寄附事業にもりまちも共同で取り組んでいます。森林整備の促進に寄与するとともに、わたしたちが日常的に岡崎の木に触れる機会にもなっています。

自然豊かで特色のある暮らし、文化が息づく魅力的なオクオカエリアですが、人口は減少傾向にあります。もりまちではオクオカへの移住相談窓口「もりまっち」も運営。移住に興味のある方向けに、空き家見学ツアーや里山の仕事体験イベントなど様々な「もりまっち」機会を提供しています。

もりまち OKAZAKI

株式会社もりまち

岡崎市淡渕町字堂面１２５

https://morimachi-okazaki.jp/